

## 授業の最適化

話題提供者 上智大学文学部教授 加藤 幸次

2001.12.1

私は、上智にいるんですけども、あんまりこういう会に出るような人間ではありませんで、個々の実践をやっているというだけです。従って、学力論争なんかあまり関係ないと思っているんですね。要は、力をつけることは大事だと思っている。だけど、論争があまりにもうるさいので、ちょっと塵を払う、自分たちがやるのがやれないと困るからというので、本を書いたんです。

データの取り方もずいぶんみなさんラフだと思います。今の市川先生の言葉で言う学習時間でも、学習時間をどうやってアンケートでとったんですか、と私は聞きたいです。また、国際比較というのもよくやられますけれども、日本の場合、家で勉強するということに塾の時間をどうカウントしてるか。それを考えると、学習時間が少ない少ないというけれど、実は非常にあやしいデータです。それから、授業時間が3割減る減るといいますが、私は70年から72年にかけてアメリカの小学校の教師をやっておりました。日本の中学校の教師もやっておりましたが、ですから考え方は相当みなさんと違ってきます。しかしアメリカははじめから土曜日休みなんです。それから、アメリカは夏休みの3ヶ月、子どもがみなあそんでいるかという、そんなことはありません。ものすごくエンリッチメントない教育をしています。また、トフルのスコアを問題にすることがありますが、トフルを受けられる東南アジアの人というのは、一回20ドル以上払って受けられる、特定の社会層の上の人だけです。それこそ荻谷さんが階層のことを問題にしておられますが、もっとしっかり考えていただきたいことです。日本はもう今、一般の高校生までうけるようになっていきます。すると、スコアが低くなるのは当たり前なんです。ですから、こうした学力低下論を展開する上で議論に出てくるデータの取り方というのが非常に不確実であるというのが、私には非常に不満です。

私は国研に15年いて、上智大学にうつって15年目ですが、国研の時代に国際比較をやっておりますけれども、これもみんな勝手に低下論者が低下したところだけをデータとして採用するんですね。悪い癖だと思うんですが。とにかく、学力低下を示すようなしっかりしたデー

タはないんですね。これは、是非お考えいただきたい点であると思います。それから、私も国研時代に国際比較を行いました。結論からいうと学習時間と学習到達度は無関係です。どんなにクロスしてもとれない。これは非常におもしろい問題です。

100マス問題とやらを一生懸命やって、昨日は時間が30分かかったのが今日は28分になったとって喜んでる。ああいう学力観でやってこられると、みなさんその程度の認識なのかとちょっと考えさせられます。特にマスメディアの人が多から言っておきたいと思います。その程度の人たちが取材をして作っておられるというのは非常に残念に思います。

私は先ほど言いましたように実践家でありまして、あまりよそごとを考えずやってきました。よそごとをやるような余裕がありませんでした。簡単にいいますと、私は、昭和35年から60年、次のような仕事に携わってきました。中学の教師を愛知県ではじめて、2年でやめて、それから名古屋大学の大学院にいて、さらにアメリカに留学しています。ニューヨークに日本人学校を作って、1975年、帰ってきたら運のいいことに、私の隣町、愛知県の知多半島にある東浦町に、日本的なオープンスペースの学校が3つほどできてました。一つは緒川小学校という学校と、卯ノ里小学校というところと、それから、岐阜の大垣の郊外にある池田小学校、その3つの学校が核なんですけど、この20数年、個性化教育というモットーのもとで動いてきました。ともかく校長さんは10人以上かわる、中の研究主任級の人もよくかわる、ひどいときは人事異動で3分の1はかえられる。けれど、幸い、20数年、みんなで動かしてきました。

それで、20年たったところから、追跡調査を始めまして、卒業生の全員にアンケート、それから一部インタビューして、またその当時の教育長さん校長さんにインタビューをやって、今年はいずれの学校で教えられて転出した先生方がそれぞれ150ぐらいおりますが、アンケート用紙を配り終わったところです。結果としてはだいぶおもしろいものが出てきております。

そういう学校でやったことは、当たり前ですけど、学

力を何と定義しようと、学力をつけることでした。特にこれらの学校は普通のしかも田舎の学校です。常に地域から読み書き計算の力が全国平均ないといって悩まされ続けてきた学校です。したがって、先ほどの多様なプログラムというところが市川先生の意見と一番あうところなのですが、はじめから多様化せざるを得ないんです。私はアメリカで長く研究したり、教師をやっていたから、そういう考え方が当たり前です。一人一人に学力をつけるということ以外何ら我々の仕事ではないということです。そうすると、必然的に個別化したり個性化せざるを得ないんです。したがって、100マス問題やドリルだってやらないわけではないです。けれども、やはり、そうした活動を、最低限、ある文脈のなかに置くという考えをしないと、ただ10たす10がいくつなんてやっているのは、そんなことは教師としてやるべきことではないです。ドリルをやるにしても、当然、文脈から離さないようにして、ドリルをやってきました。

ただ、最近、認知心理学の本を読み出していたら、何かちょっと、どう教えるのか、そんなもんじゃどうもだめだということがわかってきました。少し改良をはかろうと思っています。同時に、社会科や理科をめぐって、これは問題解決学習をもっときちんとやらなきゃいけないと思うようになりました。先ほどの市川先生の言葉で言うならば、きちんと教えなければいけないということです。先生がモデルになって、おもしろい実験をよくやらなければいけない。私は、観察や実験を重視して、ひとりひとりがやれることはひとりひとりにやらせるという方針を出しただけです。当然、学習材はたくさん必要です。先生の手もたくさんあります。今のように加配があるわけではないので、ボランティアをはじめから組織してやっておりました。それが、総合学習のはじめです。これも非常に幸いなのですが、私がはじめた20数年前というのは、前の前の学習指導要領の移行期で、ゆとりの時間の試行期に入っておりまして、したがって私たちはすぐそこにとびついていました。ゆとりの時間でやったことは、今いましたドリルのようなものです。そんなこともやりましたけれども、カリキュラムのバランス上、どうしても楽しい授業、自分の課題を追求するという総合学習、私たちはじめから総合学習と呼んでますんで、それを20数年やってきました。学習というのは、一つの形ではないんです。もちろん子どもひとりひとり

の中の学力の構造は統一したものでありたいと思うんですけども、教科の性質や特殊性やいろんなものを考えると、そういうふうには多様なプログラムを組まねばならないわけです。

今年も3校とも非常に活発です。普通私は自分の学校で自分で講演することではなくて、よその人に講演していただくんですけど、私は10年記念のときは講演しました。そのときに、大正自由教育も10年でつぶれたけど名は残ったから、この学校がつぶれても名は残るって言い切ったりもしたんです。結局その後、先生方も盛んに転入しておられますが、続いています。20数年たちましたが、もう今は自分たちでどんどんやられています。そういう感じで、ほんとうに喜んでおります。

最後に、学力は何かということ、やはり一方で議論すべきです。市川先生の本も読ませていただいて、見える力、見えない力、あるいは生きる力まで3段階の学力であって、本当にそうだと思います。けれども、どちらかという、そういう学力観を、そんなにきりきりやることではないんですけど、それを実現するためにどういう授業を組むかということに終始していきたいと思います。授業の最適化という言葉は、今はなくなっていますが、名古屋大学の広岡先生の言葉です。先生には、はいまわる経験主義という言葉もあります。私は上田先生や重松先生派ですので、経験主義の派です。とにかく、一世代前、学力低下論を聞かされて育っている人間です。今日は学力論争の行方ということですので、自分としては、やはり授業を改善していくこと、そういうことに結局はたどりつくのではないかなと思っています。議論していて、学力論争というものはきりが無いと思っています。これは、あるところで終わるほうがいいのではないかと思います。難しいのは、社会的な背景が変わってきたという指摘があるように、親も変わってまいりまして、そこが非常に難しいところです。どうやってやる気にさせるか、あるいは内的、外的動機付け、市川先生の本を読ませてもらって、そんな単純に二分してはいけないということもよくわかっておりますけれど、ごく一般的には内的動機付けをもった子ども、学校にきたら楽しく勉強できるという子を目指して、自分たちはやりたいなあとというふうに思っております。私が四半世紀がんばってやってきたことはそういうことです。